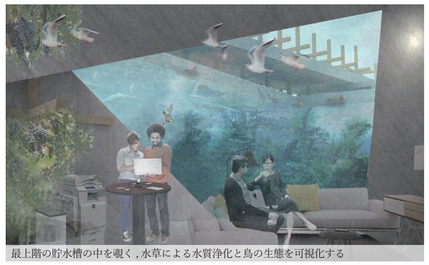
Bird gate

人のための結節点として大きく発展してきた池袋だが、
開発が進み人間中心のまちづくりが行われてきた。
その結果、現代の高気密都市には、すき間がなくなり
生き物（都市鳥）の居場所が減少してきている。

そこで、本提案では鳥の為のゲートウェイを作ることで、
人間と鳥の関係性について再考する。
鳥にとってこの場所が都市のボイドへと種子を運ぶハブとなり、
まち全体に緑が持続的に拡がる。

鳥の道を臨む，鳥の為の空間と人の活動の場が交錯する



最上階の貯水槽の中を覗く，水草による水質浄化と鳥の生態を可視化する

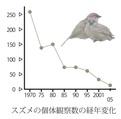
レストラン前の農園，雨水や鳥の糞を利用し作物を育て、建物内で食材として循環

大通りから臨む，都市と建築内緑のを連続させ建物へと導く

01. Background　－池袋の特徴－

［減少する都市鳥］

池袋におけるペンシルビルも含めた高層建築物の拡大、生ゴミの増加は都市鳥の減少に大きな影響を与えてきた。年々、営巣に適した場所が不足していくなか、エサの減少も重なり少子化は今も進行している。



スズメの個体観察数の経年変化

［木造密集地域］

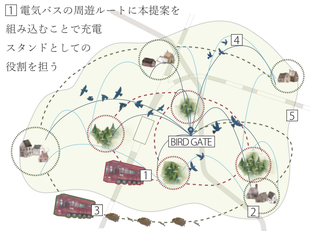
豊島区内では木密地域不燃化 10 年プロジェクトの不燃化特区が多数指定され、老朽化した空き家の管理も問題視されている。

［イケバスの登場］

2019 年秋、新たな池袋副都心移動システムとして電気バス（イケバス）が導入される。回遊ルートは、4 つの公園、池袋西口公園、中池袋公園、防災公園、南池袋公園を周回する。

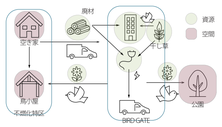
02. Proposal　－鳥のゲートウェイ－

1 電気バスの周遊ルートに本提案を組み込むことで充電スタンドとしての役割を担う



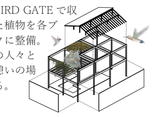
2 不燃化特区内の空き家を減築し鳥小屋をつくる
3 廃材を回収する電気バス
4 BIRD GATE、各公園、鳥小屋の間を鳥たちが往来する
5 鳥の移動により植物の種が地域全体に運ばれ緑の恩恵を受ける

［循環モデル］

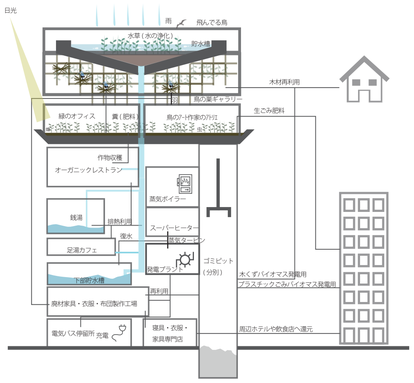


［空き家→鳥小屋］

柱梁と床の一部を残し、BIRD GATE で収穫した植物を各ブロックに整備。地域の人々と鳥の憩いの場となる。

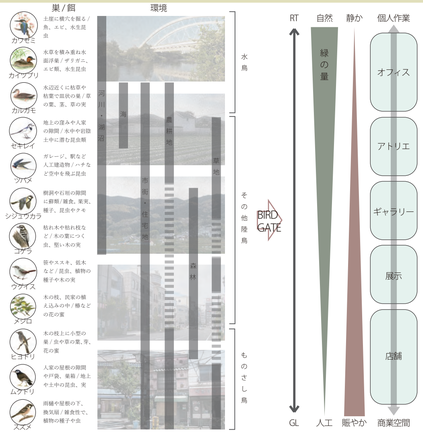


03. System　－建物内の相関図－

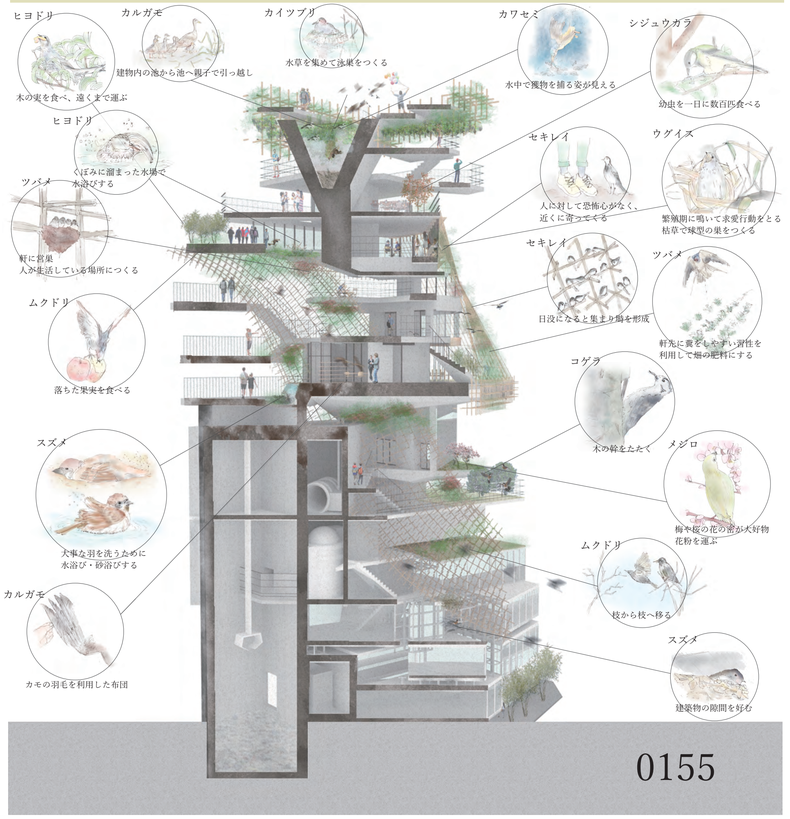


バイオマス発電と水の浄化機能を中心とした流通システムに鳥が関わることでビルの利用者や街に副産物を還元していく。

04. Zoning　－鳥の生態と呼応した建築－



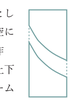
07. Section　－発見する鳥の生態系－



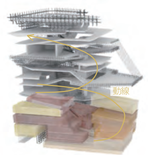
05. Design　－鳥の行動圏に基づいた設計プロセス－

1 鳥が通る大動線

鳥が通る大動線として十字路から上空に向かうボイドを作る。これにより上下に全体のボリュームが分かれる。



2 ボリュームの蓄積

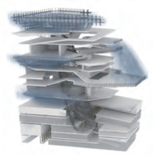


下部は、用途別にボリュームを分け噛み合わせるように配置。全体として上階に向けて空間に粗密をつける。

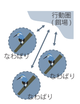
3-Ⅰ 鳥の行動圏（下）

商業空間はボリュームの間に鳥だけが通れる動線を紡ぐように通す。人工物を好む鳥の巣や居場所ができる。

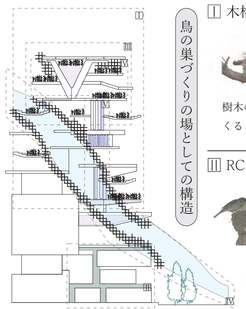
3-Ⅱ 鳥の行動圏（上）



上部は、ヒトの居場所と等価に鳥の行動圏を作っていく。なわばりと行動圏が別にある鳥が集まる。



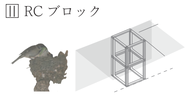
06. Structure and Eco-system　－構造と環境設備－



Ⅰ 木格子構造

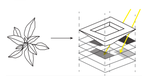
樹木の枝と枝のつなぎ目に巣をつくるような鳥の為の格子構造

Ⅱ RC ブロック



コンクリートの梁下の暗い場所に巣をつくるような鳥の為のブロック構造

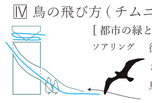
Ⅲ 放射状配置（太陽光最大効率配置）



［種子の散布を促す畑］

縦長の建築の床面積における日照率を高めるため、植物の構造と同じような放射状に段々と配列される床配置にする

Ⅳ 鳥の飛び方（チムニー効果）



［都市の緑と連続させる］

ソアリング　街路樹とボイド内の緑を連続させ鳥のソアリングを促し、鳥を BIRD GATE へ導く

［高所に鳥の居場所をつくる］

ホバリング　都市に少ない高所に緑をつくることで自然界に近い環境をつくる

Ⅴ 水の循環（放射冷却）

［水を集め循環させる建築］

・雨水を貯水して建築内を循環させ、含水率の高い建築とする
・鳥の水飲み場として心地よい空間を作ると同時にコンクリート内を通る配管による放射冷却によって、人にとって心地よい空間を作る